

横浜市 歴史博物館 NEWS 18 2004・3

◇ いんたびゅー 大三輪龍彦

「文献と発掘を合わせた研究で中世の都市像をより明らかに」

◇ 企画展「東海道と戸塚宿」によせて

◇ <研究余話> 船釘鍛冶 飯島秀雄さんの船釘作り

◇ 収集・収蔵資料の紹介[19] 西八朔遺跡1号墳出土遺物

◇ <常設展示室探検> 南堀貝塚模型

◇ <史跡散歩> 保土ヶ谷から戸塚の旧東海道

◇ <知ってますか?> 関連図書コーナー



鶴見大学教授・横浜市文化財保護審議会委員
大三輪龍彦（おみわ・たつひこ）

文献と発掘を合わせた研究で 中世の都市像を より明らかに



◎なぜ中世考古学に興味をもったのですか。

鎌倉に生まれ、子どものころは周囲の山が遊び場でした。山の中に穴蔵がいっぱいあって、それは中世のお墓である「やぐら」で、その時はお墓だと知りませんでした。高校生のころ、土に埋まって露出していないやぐらを見つけて、地元の考古学者の赤星直忠先生に指導していただき発掘しました。私の家が寺で、赤星先生はじめていろいろな歴史研究者とお付き合いがあったことや、祖父が歴史好きだったことも、私に影響していると思います。

◎それで大学で考古学を専攻したので

すか。
 大学では考古学でなく、文献史料に基づく歴史研究をやっていました。その一方、授業が終わると、考古学者の和島誠一先生のいる資源科学研究所に通い、そこで考古学を独学で身につけました。和島先生には高校時代から指導を受けた。三上次男先生に紹介されて、先生が発掘する現場に行きました。その現場とは三殿台遺跡（横浜市磯子区）で、私も六十日

間、あの発掘に係わったのです。

寺院址や墓から都市へ

◎中世考古学にはどんな魅力がありますか。

中世の考古学はだいたい城郭研究から始めるのですが、私の場合、鎌倉の発掘に携わるようになり、鎌倉について調べていくと、文献だけでは分からない。文献は何年に何があったか、といった時間軸の資料としては優れていますが、空間軸において、都市の具体的な様子は伝えてくれないのです。それで文献ともの、つまり発掘で得られる成果と、一緒にした形で研究すると、当時の都市像が一層明らかになるだろう、と。発掘する場所も、以前は寺院址とかお墓でしたが、昭和五〇年代に入ると、鎌倉の市街地で古い建物の建て替えが盛んになり、それに伴い、中世の都市があったところで発掘が行われるようになりました。それで得られた結果と文献を合わせて何本か論文を書いたところ、当時、東京大学教授だった石井進先生が評価してくださったのです。私のこうした仕事は、文献と発掘調査を突き合わせた中世都市研究が広が

る、一つのきっかけをつくったと思います。
 ◎中世都市の考古学的研究は始まって間もない、ということですか。

そう、掘るたびに新しいことが分かっています。鎌倉で今後さらに調査が進めば、これまでの定説が変わる可能性はありえます。

横浜でもまだ出るはず

◎横浜市内の中世遺跡については。

まだまだたくさんあると思います。鎌倉に接する金沢・栄・戸塚区などには鎌倉市内と同様、鎌倉時代の遺跡が考えられますし、発掘調査されていない栄区上郷の証菩提寺も非常に古いお寺ですから、お寺やその周りには中世の遺跡が残っているでしょう。鶴見区でも、金沢文庫所蔵の「鶴見寺尾図」という中世の絵図があるので、何か見つかる可能性は大きい。また磯子には昨年、この特別展で紹介された平子氏、鶴見には師岡（諸岡）氏などの有力な武士がいましたから、それに関連する遺跡が出てくるかもしれません。

◎そうした遺跡の発掘調査は今後、進められるのでしょうか。

中世の遺跡に対する関心は以前より高くなり、中世の跡が見つかるほど注意深く掘られるようになりました。ただ、今の発掘は、開発でやむを得ず壊されるところを、その前に掘って調査する、というやり方です。理想としては「これを知りたいにはここを掘らなければならぬ」という学問的な問題意識をもって発掘すべきなのですが、残念ながらそれがで

きる状況ではないのです。

展示にリズムが必要

◎文化財保護についてどう考えますか。

この館に隣接する歳勝土遺跡の方形周溝墓のように、保護するには、土をかぶせて埋めておくのが一番なのです。外から見えないようにすると、土の遺跡にはどうしてもかびなどの問題が出てきますから。しかし文化財には活用という意義もありますから、遺跡を傷めない画期的な方法があれば、それを採り入れてどんどん活用した方がよいと思います。

◎当館への期待は。

常設展を見るために、何回も足を運んでもらうような展示を目指してほしいのです。それにはリズムが必要です。展示は一つの演劇だと思ふのです。始まりがあつて、盛り上がりがあつて、それで終幕を迎える、というよう。今の展示も面白いのですが、何回も見たいと思わせるには、どこかに盛り上がりを作り、その場所を時々変える、といった工夫が必要だと思います。全体は同じ展示でも、少し違うものがあれば「あれ、何」と気になります。見る人を飽きさせないことが大切

です。

おみわ・たつひこプロフィール
 ●一九四二年、神奈川県鎌倉市生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科博士課程史学専攻満了。大学卒業後三年間、鎌倉国宝館学芸員を務めた後、大学院に進む。その後、各地の発掘調査を手掛け、さらに鶴見大学講師、同助教授を経て現在に至る。専門は中世考古学。鎌倉の市街地の発掘調査に基づき、鎌倉時代の都市の研究を進める。浄光寺住職。

●著書「鎌倉のやぐら」（かまくら春秋社）「中世鎌倉の発掘」（編著、有隣堂）「鎌倉の考古学」（ニユーサイエンス社）など。

企画展 東海道と戸塚宿 によせて

江戸と京都を結ぶ江戸時代の大動脈・東海道、その五番目の宿場である戸塚宿（戸塚区）が成立して今年で四〇〇年になります。これを記念して、当館では、四月一日（土）～五月一六日（日）の会期で戸塚宿四〇〇周年記念企画展「東海道と戸塚宿」を開催します。

東海道五十三次と総称される東海道の宿



初代広重の「東海道五拾三次之内 戸塚」（保永堂版）



初代広重の「五十三次名所図会 六 戸塚」

場の多くは、慶長六（一六〇一）年正月に徳川家康から公用に関する人馬役の負担を命じる朱印状が交付されており、これによって宿場が成立したと理解されます。市域の神奈川宿・保土ヶ谷宿や、近隣の品川宿（東京都品川区）・藤沢宿（藤沢市）などは、同年の成立になります。しかし、東海道の全ての宿場がこの段階で一挙に成立したわけではなく、成立の年次が若干遅れた宿場もありました。戸塚宿の場合は、保土ヶ谷宿と藤沢宿の距離が四里九町（約一七キロ）とわけて長く、またその行程が武蔵・相模両国の国境である丘陵地帯を横断するなど、両宿間の人馬役負担が重かつ

ため、実際の往来に際しては、両宿の間にある戸塚町に宿泊したり、戸塚町の人々が人馬を負担するケースが多かったようです。しかし、宿場としての人馬役の負担は、同時に公用以外の旅人の荷物の運搬や宿泊を許可されるという特権をもつことでもあったため、隣接する藤沢宿からその差し止めを求める訴訟が起きています。これに対して、戸塚町では澤邊家を中心に宿場の設置運動を展開し、三年後の慶長九（一六〇四）年には正式に戸塚宿が成立します。これにより、戸塚宿は、東側の保土ヶ谷宿（保土ヶ谷区）と西側の藤沢宿まで、公用の書状や荷物を運ぶ人馬役を負担することとなりました。

また、当初は戸塚町のみでしたが、人馬役の増大などのため、後に吉田町と矢部町が加わり、相模国鎌倉郡に属する三つの町で戸塚宿を構成することとなり、宿場に賦課された人馬の供出

については、一ヶ月の内、戸塚町が一日間、吉田町が七日間、矢部町が四日間というように、期間を定めて三つの町が順番に負担していました。

天保一四（一八四三）年の調査によれば、戸塚宿の人口と家数は、二九〇六八・六一三軒（この内、本陣二、脇本陣三、旅籠七五）です。これは、隣接する保土ヶ谷宿（二九二八八、五五八軒）とほぼ同じ規模であり、神奈川宿（五七九三八、一三四一軒）の約半分となっています。しかし、旅籠は七五軒存在しており、神奈川宿の五八軒を上回ります。これは、成人男子の一日の歩行距離がおおよそ一〇里（約四〇キロ）であることと、江戸日本橋から戸塚宿までの距離が一〇里半（約四二キロ）とほぼ一致するため、日本橋を朝早く出立した旅人が丁度宿泊する地点に宿場が存在することによるものと考えられます。一九世紀に作成された東海道を題材とした双六において、戸塚宿の場面に「泊」（一回休みのことと思われる）と記されているのも、こうした第一日目の宿泊地点である戸塚宿の特徴をよく示しているものといえます。また、東海道から鎌倉道が分かれる分岐点でもあり、初代広重の「東海道五拾三次之内 戸塚」（保永堂版）には「左りかまくら道」と記された道標がみられます。

このような戸塚宿をめぐる様相を、展覧会では、本陣であった澤邊家の所蔵文書、各種の浮世絵、絵巻物などによって紹介していきます。

（斉藤 司）

船釘鍛冶 飯島秀雄さんの船釘作り

一、和船と船釘

現在横浜地域で使われている小型の船はほとんどがFRPと呼ばれる強化プラスチックでできています。軽く、丈夫で、手入れいらず。またたく間に普及し、それまで主役だった木造船はみるみるうちに少なくなりました。

木造船は洋式船と和船とに分けられます。洋式船は、竜骨と呼ばれるあばら骨に板を張って船体を造ります。竜骨によって船体を支えているのです。ところが和船は、竜骨がない独特の造りをしています。船底から板をU字型につないで立ち上げ横方向を梁で支える構造で、断面を見るとまるで丸木船のように板をつないでいるのです。この板をつなぐには絶対に欠かせない、独特な部品が船釘と呼ばれる釘です。船釘にはいくつか種類があります。板と板をつなぐために使うオトシクギ、船底部分の板と側面部分の板をつなぐときなどに使うトオリクギ、船の舳先や側面上部など釘の頭が見えるところに使われるカシラクギなどです。

かつては全国で和船は造られていました。当然それらの船を造れる数の船釘が作られていました。けれども和船が使われなくなるとともに船釘の需要もなくなり、船釘を作る職人も姿を消してしまいました。ところが横浜にはまだ現役で船釘を作る鍛冶職人がいます。鶴見区に住む飯島秀雄さんです。

二、飯島さんの船釘作り

飯島さんが働いている神奈川県浦島町の大村物産という鉄工所を訪れたのは、年が明けてまもない一九九七（平成九）年一月のことでした。金属を削ったり、溶接する大きな音がこだまする中で、はじめて飯島さんにお会いしたのです。飯島さんは、ベルトハンマーに向かって汗を流したたせていました。

さっそく飯島さんの仕事を見学させていただきました。

船釘は、材料となる鉄を熱し、たたき延ばして作ります。飯島さんは、最初に左手でハシと呼ぶはさみで材料の鉄をつかみ、コークスが焚かれて真っ赤になったホド（炉）にくべます。材料の鉄はコークスの炎で熱せられ、赤くなります。これを飯島さんはアカめると呼んでいます。すると飯島さんは、左手でハシを持って材料を取り出し、ベルトハンマーに差し込みます。ベルトハンマーについているペダルを右足で踏み込むと、ハンマーが上下に動いて真っ赤な鉄を叩くのです。飯島さんは左手の首を動かしながらハンマーが材料に当たる位置を変えて延ばしていきます。鉄がさめてしまったら再びホドにくべ、アカめたとてまたベルトハンマーを使います。

飯島さんが右手にげんのうを持ち、先端がとがるようにして形を整えると、釘の先端から胴にかけての部分ができあがります。釘の頭ができていない未完成な状態を、飯島さんはイワシと呼んでいます。次にこのイワシに頭をつけなければなりません。今度は、胴をハシではさみ、釘の頭になる方をホドにくべてアカめます。ホドとベルトハンマーの間には、ハチノスという蜂の巣のように穴のあいた道具があり、その穴にナラシという棒状の道具を据え付けてあります。ナラシの上の部分は平になっており、その上に材料を載せ、げんのうで叩いて船釘の頭をつけていきます。いくらかアカめられているとはいっても相手は鉄です。げんのうを持った飯島さんの右手に力が入っているのが見ていてよく分かります。頭の形は釘の種類によってそれぞれ違いますが、飯島さんは左手に持ったハシを上手に操り、叩く位置を微妙に変えながら右手のハンマーを振り下ろしています。何回かアカめて、頭の形を整えて一本の船釘ができあがるのです。

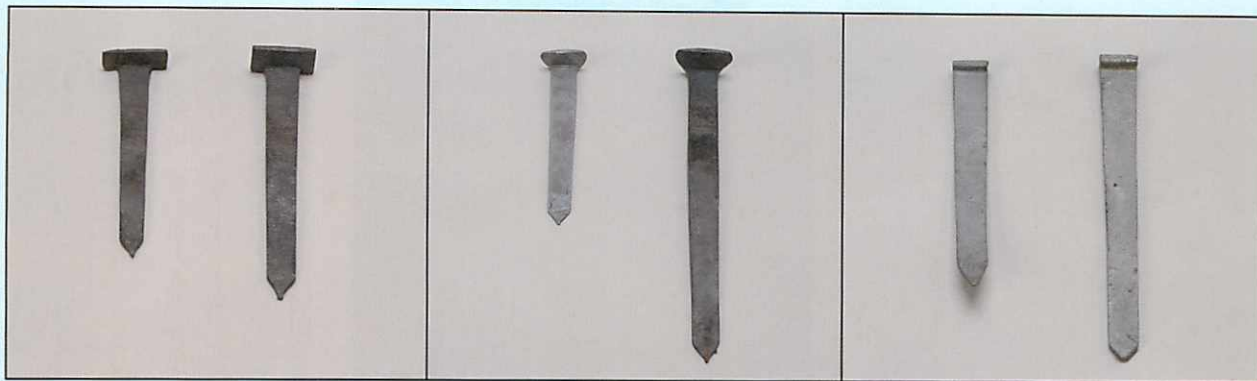
このように言葉で記すと時間がかかっているように思えますが、飯島さんは素早く船釘を作ります。大きさにもよりますが、かつては一日数百本もの船釘を作ったこともあるそうです。

三、船釘鍛冶に弟子入りした頃

飯島さんは一九三三（大正二二）年四月三

日に生まれました。尋常小学校を卒業するとすぐ、現在の京浜急行神奈川新町駅にほど近いカジトメという鍛冶屋に奉公に行くことになりました。五年間の年奉公だったそうです。カジトメは神谷留吉さんという人が開いた小さな鍛冶屋でした。飯島さんの記憶では、仕事場は現在のガレージくらいの大きさだったそうです。飯島さんがオヤジと呼ぶ親方神谷留吉さんのほかに兄弟子がいって、三人で仕事をしていました。ここでの飯島さんの仕事はサキテでした。

サキテというのはマタサと呼ばれる大きく重いハンマーを振り下ろし、材料の鉄をたたく人のことです。カジトメにはベルトハンマーなどの機械はありません。仕事はふたり一組で行っていました。オヤジはふいごを使って風をおこし、コークスを焚いて材料となる鉄をアカめます。頃合いを見て、真っ赤になった鉄をハシで持ち、地面に埋めた鉄の臼、カナシキの上に置きました。それをサキテである飯島さんがマタサを振り下ろし、叩いていました。サキテは力一杯マタサを振り下ろすだけではとまりません。船釘が必要以上につぶれてしまうからです。どのような船釘を作るのか、サキテはオヤジの様子や材料を見ながら力を加減して叩くのです。オヤジや兄弟子も手取り足取り教えてくれるわけではありません。小学校を卒業したばかりの飯島



飯島さんが作った船釘で、右からオトシクギ、トオリクギ、カシラクギです。



自分の腕よりも長い船釘の先端をベルトハンマーで延ばしています。この船釘は大阪市で復元された弁財船「浪華丸」に使われました。



船釘鍛冶、飯島秀雄さん。アカめた鉄をナラシにあててげんのうでたたき、くぎの頭の形を整えていきます。

さんにとって、大きく重いマタサの扱いはもちろん、オヤジや兄弟子との呼吸あわせを会得するのはなかなかたいへんだったそうです。

この当時、飯島さんの休みは毎月一日と一五日、月に二回と決まっていた。この日になると、よく映画を見に行ったそうです。生麦から来る市電に乗って伊勢佐木町まで行き、オデロン座などで映画を見るのがとても楽しみでした。帰りにラーメンを食べて帰ってくると、オヤジからもらった小遣いがちやうどなくなつたと笑って話されました。

逆に何が一番つらかったかを尋ねると、仕事はきつかったけれど厭うことはなかったそうです。ただ乾燥した冬場のサキテの仕事はたいへんだったといわれます。午前六時から午後二時くらいまでマタサを振り下ろし続けたあと、熱くなつた手をマタサの柄から離れたときでした。手のひらの指の付け根の部分が乾燥によって割れてしまうのだそうです。ひどいときは、手のひらからピーッという割れる音が聞こえたような気がするほどで、こんな時は中の肉まで見えてしまいました。仕事はきついと思わない飯島さんもこの痛みだけはきつかったと、語ってくれました。

四、飯島さんの現在

飯島さんは、戦争が始まった一九四一（昭和一六）年から五年ほど大船にある工場に徴用されて船釘鍛冶の仕事をするが、一九四六（昭和二一）年以降はまた船釘作りで携わってきました。けれども一九六〇年代以降、和船が使われなくなるとともに船釘の需要もなくなってきました。飯島さんが腕をふるう船釘作りの仕事は少なくなっていました。

ところが、飯島さんはいつのまにか関東地方で唯一の船釘鍛冶になり、十数年くらい前

から再び船釘作りの仕事が無い込んでくるようになりました。和船や船大工の技術を見直す動きが進められ、博物館や資料館などが和船の復元に取り組みようになったためです。東京都の大田区立郷土博物館で造られた海苔採りに使うベカブネや千葉県浦安市郷土博物館で造られた打瀬船など、復元された和船の多くに、飯島さんの船釘が使われています。当館でも実物大の和船復元模型を造るときに飯島さんに船釘作りをお願いしました。

一九八八（平成一〇）年、飯島さんは大きな仕事を引き受けました。大阪府で江戸時代後期に海上輸送の主役になった弁財船、いわゆる千石船を復元することになったのですが、その船釘作りの仕事です。使われる船釘の数はおよそ二万本、しかも大きな弁財船のものです。作ることができません。自分の年齢と体力を考えたそうですが、最後の仕事と思って引き受けることにしたそうです。一年余りをかけて注文の船釘はようやくできあがりました。浪華丸と名付けられた弁財船は無事一九九九（平成一一）年に完成し、大阪湾で実際に航海を行いました。現在は大阪市の「なにわの海の時空館」で公開されています。

飯島さんはこの四月で八一歳を迎えますが、まだまだ現役です。とはいっても毎日出勤するわけではなく、頼まれると大村物産に出向いていきます。この一月にも二週間ほど鉄工所の仕事を手伝ってきたそうです。

この一年は船釘作りの仕事はありませんでした。けれども、自分ができる限りは頼まれれば船釘はいつでも作ってやるよと、現役の船釘鍛冶飯島秀雄さんは頼もしそうに話してくれました。

（刈田 均）

西八朔遺跡 一号墳出土遺物

西八朔遺跡は、横浜市の北西部にあたる緑区西八朔町にあります。地域の北部をほぼ東西に流れる鶴見川の上流域で、恩田川と合流するあたりから北西に展開する標高

六〇メートルほどの台地上に位置します。一九九七（平成九）年と翌年に発掘調査が行われ、縄文時代の炉跡、集石遺構、弥生時代の竪穴住居跡六軒、古墳一基が発見され、弥生時代後期の小規模な集落跡を中心とする遺跡であることがわかりました。



須恵器の甕と土師器の钵、須恵器の蓋



周溝に埋められた須恵器の甕

古墳は、調査前には、台地の中央部にある径二メートル、高さ一・五メートルの墳丘のような高まりとして残っていましたが、調査の結果、幅約二・八メートル程の溝が全面に設けられた、外周で径約二〇メートルの円墳であることが判明しました。残念ながら、墳丘の大部分はすでに削平されており、主体部は確認されませんでした。しかし、古墳の東側の周溝では、溝の底に正位に埋設する形で須恵器の甕が発見されました。甕はほぼ完形で、口縁の部分が径二四・二センチメートル、胴の上部の一番ふくらんだ部分の径は四八・二センチメートル、器高は四二・六センチメートルです。口縁部のすぐ下には断面が三角形である帯が一条めぐって

おり、その下には四条の櫛描の波状の文様がめぐっています。外表面は全面に叩き目がみられ、内部は丁寧に磨かれています。また胴の上部全体に灰白色の自然釉がみられます。これらの特徴から五世紀後半に生産されたものとみられます。

須恵器の甕は、溝底に土坑を掘って設置している状況から、古墳が造られたのと同時期に埋設されたものと考えられます。古墳が造営され、埋葬行為を行う際に行われた何らかの祭りにともなうて埋納されたのでしょうか。

また周溝の覆土内からは土師器の坏が一〇点、須恵器の蓋一点が発見されました。それらは周溝の中央部分において、正位あるいは逆位の状態で置かれた形でみつかりました。土師器の坏は周溝が二〇センチメートルくらい埋没した状態で検出されているので、五世紀後半代のもですが、須恵器の甕よりやや時代が下ると考えられます。これらの土師器も、古墳とその周溝を意識して埋められたものと考えられ、古墳に対する祭りに関係するものと推測することができそうです。

須恵器の甕は、市域で発見されている中では最も古い時期に属する完形の優品であり、遺物は一括して横浜市指定文化財となっています。

（平野卓治）

常設展示室探検

みなんぼりかいづか 南堀貝塚模型

南堀貝塚は、都筑区南山田にある縄文時代早期・前期の遺跡です。一九五五（昭和三〇）年に学術発掘され、中央に広場をもつ縄文時代前期の集落の姿が日本ではじめて明らかになりました。発掘には多くの市民が参加し、その成果は『横浜市史』にまとめられています。その後の調査でわかったことも加えて、常設展示室「原始Ⅰ」



には遺跡の模型を置き、壁面には縄文時代の暮らしの様子を再現した図を掲示してあります。

展示では縄文時代前期の人々が台地の上に広場をとり囲むように何軒かの家を建てていたこと、当時は縄文海進によって鶴見川や早淵川の奥まで海岸線が入り込んでいたこと、人々が海岸で採った貝を食べたあとでその殻を斜面や竪穴に捨てたことなどがわかるように工夫しています。

貝塚から出土した資料とあわせてご覧いただくことで、縄文時代に生きた人々の姿が目に見えてくるのではないのでしょうか。

史跡散歩

保土ヶ谷から戸塚の旧東海道

今回紹介するコースは保土ヶ谷から戸塚まで、旧東海道を歩くルートです。出発点はJR横須賀線の東戸塚駅、終着点はJR戸塚駅周辺で、寄り道を含めると、七キロ弱の行程です。



柏尾の大山道の道標

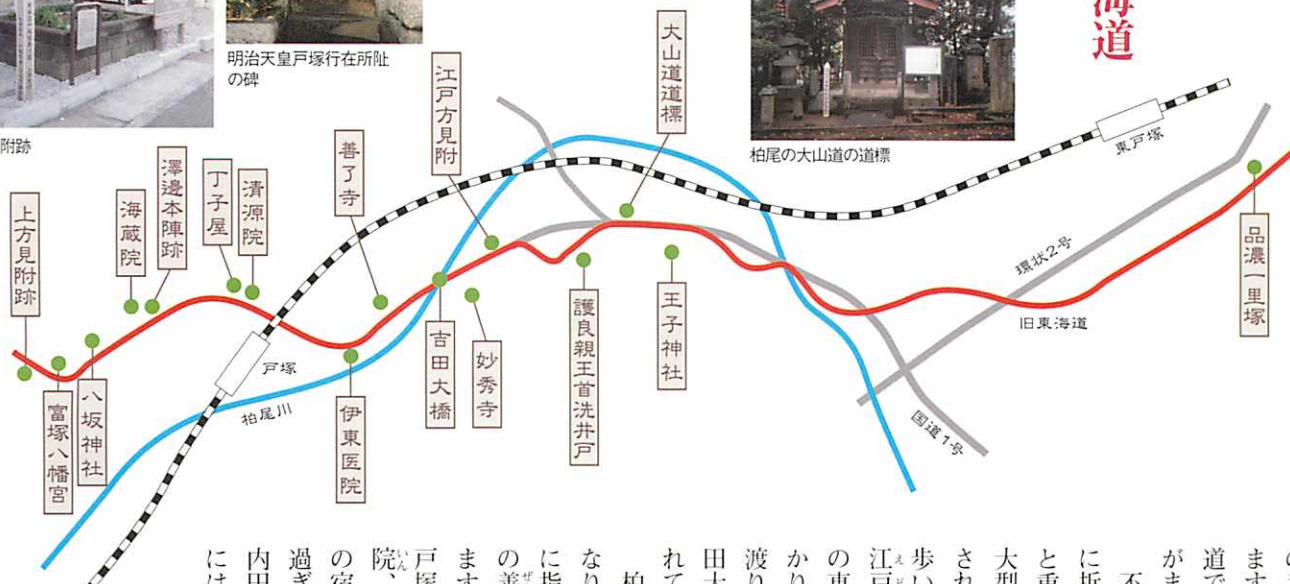


明治天皇戸塚行在所跡の碑

まず、東戸塚駅南側の商業ビル屋上から環状二号を渡橋すると旧東海道に出ます。ここからいったん保土ヶ谷方面へ向かうと、すぐに品濃一里塚です。品濃一里塚は江戸期の姿をとどめている遺構で、県の史跡です。来た道を戸塚方面に戻り丘陵の旧道を進みますが、この辺りの道幅がほぼ江戸期のものです。環状二号を渡り丘陵から平地に下り進むと、国道一号をして柏尾川にぶつかります。この地点から戸塚まで旧東海道はほぼ国道一号と重なります。国道一号を進み、柏尾町に入りますが、この周辺には建武の新政にかかわり、非業の死を遂げた護良親王の伝説地がいくつかあります。親王の首が葬られたという王子神社や「護良親王首洗井戸」などは伝説の雰囲気を感じて今に伝えています。不動坂の三叉路



上方見附跡



の手前に国道一号を右側に折れる道がありますが、この道は江戸期には大山へ向かう道でした。現在この場所には大山道の道標がまとめて置かれています。

不動坂からいったん国道一号を離れ、左に折れる道が旧道で、五太夫橋で再び国道と重なります。国道を進み吉田町に入り、大型店舗の手前あたりに一里塚があったとされ、先の品濃一里塚から一里（約四キロ）歩いたこととなります。またこの店舗前に江戸方見附跡があり、当時はここが戸塚宿の東端でした。さらに進むと柏尾川にぶつかり、広重の絵に描かれている吉田大橋を渡りますが、絵にある鎌倉道の道標は、吉田大橋の手前、国道の東側の妙秀寺に置かれています。

柏尾川を渡り、矢部町に入り旧宿場街となります。この辺りには市の歴史的建造物に指定されている伊東医院やモダンな造りの善了寺など風格のある建物が散在しています。JR戸塚駅を左に見て線路を渡り、戸塚町に入ると、左に徳川家ゆかりの清源院、江戸期からの旅籠屋丁字屋などが当時の宿場の雰囲気を伝えます。戸塚郵便局を過ぎると、この周辺が当時の宿場の中心で、内田や澤邊本陣がありました。澤邊本陣跡には現在「明治天皇戸塚行在所跡」の碑が建っています。この先には海蔵院や八坂神社、戸塚宿の鎮守富塚八幡宮など、戸塚宿の古社寺がならびます。そして大阪下の信号近くに上方見附があり、ここが戸塚宿の西端となります。

(井上 攻)

第4期「遺跡公園ガイドボランティア」募集



対象：18歳以上

募集人員：約60名

活動期間：平成17年4月1日から平成19年3月31日

応募期間：健康で、歴史・文化財に興味があり、

4回の研修（10月～11月の土・日に実施予定）に出席可能な方。

研修終了後に選考します。

申込み：往復はがきに住所、氏名、年齢、電話番号、「ボランティア応募」と書いて、9月6日までに、博物館総務企画課まで申し込んで下さい。

今後の企画展のお知らせ

- ◎戸塚宿400周年記念企画展「東海道と戸塚宿」
4月10日(土)～5月16日(日)
- ◎収蔵資料展「開国150周年記念 武州金沢藩と黒船来航」
5月29日(土)～6月27日(日)
- ◎収蔵資料展「江戸風俗絵巻」(仮題)
7月17日(土)～9月5日(日)
- ◎特別展「ワカタケル大王時代の東国」(仮題)
10月9日(土)～11月28日(日)

表紙写真は

子守奉公の少女の背中でみずがる赤ん坊は外国人夫婦も驚くほどの泣き声です。近郊からは魚を売りにボテフリがきています。人力車は今でいうタクシーです。さまざまな人が行き交う伊勢佐木町通りは明治30年代には日本一の繁華街といわれるほどの賑わいを見せていました。

??????? 知ってますか ???????

関連図書コーナー

図書閲覧室に入っすぐ、カウンターの向かい側に、本がたくさん載ったラックを見かけたことはありませんか。これは特別展、企画展のときに設置される、関連図書コーナーです。

コーナーでは、一般向けの図書から専門書まで、展示に関係するさまざまな資料を閲覧することができます。その中には、担当学芸員が企画展を開くために利用した文献や図書もふくまれています。企画展が近づくと、図書室では普段は手にとれない書庫の本からも関連図書をピックアップし、コーナーに配架します。関連図書のリストや講演会の資料も一緒に配架します。過去のコーナー図書リストもカウンターにあり、利用することができます。

関連図書コーナーは、特別展や企画展の会期中に設置されており、開館時間中はいつでも利用することができます。展示をみたあと、その内容や資料についてもっと知りたい、調べてみたいと思ったら、ぜひ関連図書コーナーを活用してみてください。



横浜市歴史博物館 ● 日誌

- (2003年10月1日～2004年3月31日)
- 10月3日 歴史講座「古文書解説教室」(12月5日まで連続10回)
 - 10月18日 特別展「鎌倉御家人平子氏の西遷・北遷」開催(11月24日まで)
 - 10月23日 <ふるさと横浜探検4>旧東海道の鶴見周辺を歩く
 - 11月1日 体験学習「かざぐるま作り」
 - 11月2日 特別展開連講演会「周防の平子氏」、体験学習「ぞうり編み」
 - 11月3日 都筑区民まつり出店参加
 - 11月16日 特別展開連講演会「戦国期越後の平子氏」
 - 11月23日 特別展開連研究講座「横浜の平子氏」
 - 12月6・7日 体験学習「風つくり」
 - 12月13日 平成15年度横浜市指定・登録文化財展／横浜の遺跡展(1月18日まで)
 - 12月14日 エントランスホールコンサート「弦楽四重奏の楽しみ」
 - 12月21日 指定・登録文化財展記念講演会 河合正朝「横浜に残る宗教絵画」
 - 12月25日～27日 全館鑑賞のため臨時休館
 - 1月11日 横浜の遺跡展研究講座 坂本 彰「西ノ谷貝塚-5000年前の暮らし-」、山田光洋「二ノ丸遺跡・四枚畑遺跡・川和向原遺跡」
 - 1月21日 歴史講座「古代史講義講座」(2月18日まで連続5回)
 - 1月24・25日 体験学習「紙すき」
 - 1月31日 企画展「製造元祖 横浜風琴洋琴ものがたり」(3月7日まで)
 - 2月1日 開館9周年記念特別講演会 大輪龍彦「中世都市を掘る」
 - 2月6日 インターンシップ(社会研修)受入れ(フェリス学院大学生2名、2月17日まで)
 - 2月7日 企画展開連ミニコンサート「リードオルガン-明治時代の音色」
 - 2月8日 歴史講座「土器づくり教室」(3月21日まで計4回)
 - 2月21日 企画展開連講演会 斎藤 龍「洋楽器に魅せられた人々-横浜文化史の中で-」
 - 2月28日 企画展開連ミニコンサート「アップライトピアノ-明治末～昭和初期の音色」
 - 3月20・21日 センター北まつり
 - 3月21日 野焼き
 - 3月25日 <ふるさと横浜探検5>国史跡八王子城跡と八王子市郷土資料館

PRESENT 読者プレゼント

いつも博物館ニュースをお読みいただきありがとうございます。感想等をお寄せ下さい。ご応募いただいた方の中から抽選で10名様に、博物館ミュージアムショップよりオリジナルTシャツと缶バッジを差し上げます。

はがきに、①お名前 ②ご住所 ③年齢 ④このニュースを手にした場所 ⑤Tシャツのご希望サイズ(L・M・子供用140cm・120cmの4種類) ⑥ニュースについての感想・要望をお書きのうえ、博物館読者プレゼント係までお送り下さい(博物館の住所はこのページの右下)。締め切りは2004年5月30日です。当選者の発表は、発送をもってかえさせていただきます。



横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

編集後記

春、博物館は社会科見学の季節になり、連日多くの小学生で展示室は熱気にあふれます。大塚・歳勝土遺跡へは市民ボランティアさんたちが案内します。この時期ボランティアさんたちは大活躍です。第4期のボランティアを募集します(詳細7頁)。考古学を勉強したい方、身体を動かしたい方、新しい出会いを求めている方、お待ちしております。

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)

大塚遺跡、都筑民家園を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

歴史博物館・大塚遺跡

月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

都筑民家園

毎月第3月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始

そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区分	個人	団体 (20人以上1人につき)
一般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。

◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。

◆「長寿のしおり」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図

横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分
(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)



駐車場あり(2時間400円)

●インターネットホームページ

<http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

